The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	共通基盤知覚がさまざまな内的経験の透明性の錯覚に及ぼす影響
Author(s)	武田, 美亜; 沼崎, 誠
Citation	対人社会心理学研究. 2009, 9, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

共通基盤知覚がさまざまな内的経験の透明性の錯覚に及ぼす影響 1)

武田美亜(東洋大学社会学部)
沼崎　誠(首都大学東京人文科学研究科)

相手との間の共通基盤知覚の大小が行為者と観察者の透明性の錯覚に及ぼす影響を検討した。また、内的経験による透明性の錯覚のパターンの違いについても検討した。25 組の男性友人ペアの片方を行為者、他方を観察者とした。共通基盤知覚の操作として、2 人だけで行なっている活動を 3 または 8 項目挙げさせた。ついで、行為者には自分の性格、社会的ジレンマ状況に対する対処行動の意図、さまざまなものの好みという 3 種類の内的経験について自己評定させ、その評定が観察者に当てられるかどうかを推測させた。観察者には行為者の自己評定を予想させ、その予想が当たっているかどうかを推測させた。その結果、検索容易性の操作によって透明性の錯覚量の違いはみられなかったが、共通基盤知覚が大きいほど、行為者の透明性の錯覚量と性格に関する観察者の透明性の錯覚量は大きかった。最後に内的経験の違いによる透明性の錯覚と対人関係の関連について考察した。

キーワード: 透明性の錯覚、行為者と観察者、共通基盤、検索容易性、内的経験

問題

自分の意思を的確に他者に伝え、他者の意思を適切に読み取ることは、対人コミュニケーション成功のための重要な要件の 1 つである(e.g., Fussell & Krauss, 1992; Semin, 2007)。しかし正確な意思疎通はそれほど簡単なことではない。人は他者に関する情報よりも自己に関する情報にアクセスしやすく、自分の視点から離れることが難しい。そのため、他者の心を推測する際にも、他者から自分がどう見られているか(すなわち他者の視点)を推測する際にも、自己の知覚や判断の方向へバイアスのかかった判断をしてしまう(Nickerson, 1999; Pronin, Lin, & Ross, 2002)。こうした判断のバイアスが原因となって他者とのコミュニケーションに齟齬が生じる可能性は、いくつか指摘されている(Gilovich, Kruger, & Savitsky, 1999; Pronin, Puccio, & Ross, 2002)。本研究では、ミスコミュニケーションの原因となりうる判断のバイアスの 1 つとして、透明性の錯覚に焦点を当てる。

2 種類の透明性の錯覚

コミュニケーションの最小の単位は 2 者関係であるといえる。この 2 者とは、自分の意思を伝えたり何らかのふるまいをすることによって他者にメッセージを伝えたりする行為者と、そうした行為者の様子を観察して送られてきたメッセージを受け取る観察者である。武田・沼崎(2007a)は、この両者それぞれに透明性の錯覚がみられると述べている。

行為者の透明性の錯覚とは、他者からは知覚できない自己の内的経験が他者に知られていると過大推定する傾向のことである(Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998; Vorauer & Ross, 1999)。武田・沼崎(2007a)は、行為者に所与の意図を込めてメッセージカードを作らせて観察者に伝えさせた。メッセージの文は固定された定型文であり、行為者の課題は所与の意図が伝わるように文に添えるイラストを選ぶことであった。この課題を 16 試行行ない、行為者には 16 試行のうちいくつの試行で自分の込めた意図が観察者に伝わっているかを推測させた。観察者には、定型文と行為者の選んだイラストを見せ、行為者がどのような意図を伝えようとしているのかを判断させた。その結果、実際に観察者が行為者の込めた意図を当てていた試行の数よりも、行為者が観察者に意図が伝わると推測していた試行の数のほうが多かった。つまり、行為者の透明性の錯覚が生じていた。このような意図の他(Keysar & Barr, 2002; Kruger, Epley, Parker, & Ng, 2005)、ウソ、緊張や不快などの感情状態(遠藤, 2007; Gilovich et al., 1998; 鎌田, 2007; Savitsky & Gilovich, 2003)、ものに対する好み(工藤, 2007; 武田・沼崎, 2007b)、性格(Vorauer & Cameron, 2002; Vorauer & Ross, 1999)など、さまざまな内的経験で行為者の透明性の錯覚が生じることが示されている。

行為者の透明性の錯覚の生起メカニズムは、自己中心性バイアスとして説明されている(e.g., 遠藤, 2007; Gilovich et al., 1998; Vorauer, 2001)。自分の内的経験についての情報は、自分にとって非常に明確でアクセスしやすいものである。そのため、他者からどう見えるかを判断する際にこの明確さからの調整が不十分になり、結果として他者にもある程度明確に自分の内的経験が知覚されると判断してしまう。

観察者の透明性の錯覚は、行為者の表面的な外見や行動からその内面を透かして見ることができている程度を観察者が過大推定する傾向のことである(武田・沼崎, 2007a)。武田・沼崎(2007b)は、行為者から観察

者に所与の意図を込めてメッセージを伝えさせ、観察者に意図の判断をさせた後、観察者に自身の判断が当たっているかどうか、すなわち行為者の意図を正しく当てているかどうかを推測させた。その結果、観察者は自分が実際に当てた数よりも多くの試行で行為者の意図を当てることができていると推測していた。行為者の透明性の錯覚と同様に観察者の透明性の錯覚も、意図のほか、感情状態(鎌田・堀・伊藤・吉野, 1999)、性格や(Swann & Gill, 1997)ものの好みなど(武田・沼崎, 2007b)でみられることが示されている。

観察者の透明性の錯覚の生起メカニズムは、ナイーブ・リアリズムによる説明が可能であろう。ナイーブ・リアリズムは、自分は世界をあるがままに正確に知覚しているという素朴な信念である(Ross & Ward, 1996)。人がナイーブ・リアリズムをもっているとするならば、他者の内的経験について何らかの判断をすると、その判断が正確である、すなわち、事実を捉えていると考えやすいであろう。また、そうした判断が正確かどうかを改めて考える場合でも、自分の判断にバイアスがかかっているかどうかを査定するためには洞察を用いるため(Ehrlinger, Gilovich, & Ross, 2005)、やはり自分の判断は間違っていないと結論づけると考えられる。

どちらの透明性の錯覚も、他者の心を推測する際に自己に関する情報や自己が入手可能な情報に重みづけがされてしまうことによって生じると考えられる。

共通基盤知覚が透明性の錯覚に及ぼす影響

透明性の錯覚量(内的経験が伝わった程度に関する推測と実際に伝わった程度の差)はさまざまな要因によって変動することが知られている。内的経験の主観的強さなど個人内要因のほか(e.g., 遠藤, 2007; 鎌田, 2005)、自己と他者の表象の重なり(Vorauer & Cameron, 2002)や共通基盤の過大評価(武田・宇賀神・内田・松田, 2006; Van Boven, Kruger, Savitsky, & Gilovich, 2000)などの対人的な要因も挙げられている。これらの要因は排他的に作用するものではなく、それぞれが効果をもっていると考えられる。本研究ではまだ実証的な証拠の少ない共通基盤の過大評価による効果についての検討を行なう。

共通基盤(common ground)とは、あるやりとりが成立するために2者が共有している知識や信念、想定の総体のことである(Clark, 1996; Clark & Carlson, 1981)。コミュニケーションの際、情報の送り手(行為者)は情報の受け手(観察者)との間の共通基盤を考慮してコミュニケーションのしかた(言葉の選び方など)を調整する(Clark & Murphy, 1982)。しかしこのとき、共通基盤がどの程度であるか、すなわち観察者が何を知っていて何を知らないかについての判断は、行為者自身が何を知っていて何を知らないかに左右されやすい(Fussell & Krauss, 1992)。したがって、共通基盤でないことも共通基盤であると誤って判断してしまう場合がある。さらに、行為者は、自分と他者の共通基盤が大きいほど、実際には共通基盤となっていないものも共通基盤となっているかのようにコミュニケーションを行なってしまう傾向があることも示されている(Wu & Keysar, 2007)。つまり、行為者は観察者との間の共通基盤が大きいと知覚するほど、実際には共通基盤となっていないものも共通基盤となっているという前提でコミュニケーションを行ない、結果として実際よりも自分の内的経験が知られていると判断しやすくなる、すなわち透明性の錯覚量が大きくなると考えられる。

観察者が行為者との間の共通基盤が大きいと知覚した場合、それらの情報を使って他者の内的経験を判断できると捉えられていると考えられるので、透明性の錯覚量は大きくなるであろう。

武田・沼崎(2007b)は面識のない同性の2者を組み合わせて、共通基盤の過大評価が透明性の錯覚量に及ぼす影響を検討した。2者を行為者役と観察者役のペアにして、両者に簡単な質問への回答をさせた後、この回答のすべて、または一部のみをペア間で交換させて共通基盤とした。つまり、共通基盤の大きい条件と小さい条件を用意した。そしてものの好みについての透明性指標を測定した。このとき、好みを尋ねる材料は男女によってなじみの程度が異なるものを用いた。お互いの性別になじみの深い材料であれば、それについての共通基盤は大きいと知覚されると考えられる。その結果、性別による材料の違いからは共通基盤知覚が大きいほうが透明性の錯覚量が大きくなることが示された。ただし、ペア間で実際に交換させたお互いの情報量の違いによる効果はみられなかった。ただし、このような結果になった原因として、全く面識のない2者によるペアを参加者としたため、共有させた情報の量の差が条件間で充分に大きくなかった可能性がある。

そこで本研究では、すでにある程度の共通基盤ができている友人同士という既存の2者関係を対象に、検索容易性のパラダイム(Schwarz, Bless, Strack, Klumpp, Rittenauer-Schatka, & Simons, 1991)を用いて共通基盤知覚を操作することによって、共通基盤の過大評価による影響を検討する。検索させる内容を共通基盤そのものではないものにするために、相手と一緒に行なった活動について検索させる。一緒に活動していれば、そこでお互いについて知ることもあると考えられる。そうした活動が簡単に思い浮かべばそれだけお互いに知っていること、すなわち共通基盤が大きいと知覚されるであろう。条件間で実際の情報量の

系統的な差を作ることなく、共通基盤知覚の大小を操作できると考えられる。なお、2 者に限らず多くの人が共通して一斉に行なうような活動を挙げても特定の他者との共通基盤知覚は変わらないと考えられるため、数人で行なっている活動は除き、2 人だけで行なっている活動に限定して検索させる。

内的経験による透明性の錯覚のパターンの違い

本研究では共通基盤知覚の違いによる影響のほか、内的経験の内容による透明性の錯覚のパターンの違いについても検討する。透明性の錯覚に関するほとんどの先行研究は 1 つの実験につき 1 つの内的経験を扱っている(例外として Vorauer & Cameron(2002)を参照。ただし複数の内的経験に関する指標を統合して透明性の錯覚に関する 1 つの指標として分析されている)。そのため、さまざまな内的経験で広範に透明性の錯覚が生じることは示されているが、錯覚の生じやすさや生起メカニズムの細部に違いがあるのかどうかなどについては明確な検討がなされていない。思考や感情などの内的経験の違いによって透明性の錯覚の生じやすさや透明性の錯覚量に違いがあるとすれば、具体的にどのような内的経験で透明性の錯覚量が大きくなるのかを明らかにすることによって、透明性の錯覚量に影響を与える要因についての新たな知見も得ることができるであろう。また、透明性の錯覚を生じやすい現実の場面を指摘して、透明性の錯覚をきっかけとするミスコミュニケーションが生じる可能性を減らすこともできるであろう。

内的経験の強さを感情喚起の程度と捉えるならば、行為者の透明性の錯覚は、性格や思考など感情喚起を伴わない内的経験よりも感情などの内的経験のほうが大きくなると考えられる。一方観察者の透明性の錯覚は、観察者にとって明確な行動に表れやすいもののほうがそうでないものに比べて行為者の内的経験を当てられると思いやすいかもしれない。ただしその場合、実際に当てられる程度も変動する可能性があり、錯覚量がどのように変動するかについて明確な予測は難しいといえる。

本研究の目的と仮説

本研究の目的は 2 点である。第 1 の目的は、相手との共通基盤知覚の大小によって透明性の錯覚量が変動するのかどうかを、検索容易性の操作によって検討することである。この目的に関する仮説は次の 2 点である。仮説 1. 行為者の透明性の錯覚量は、検索の容易な条件(共通基盤が大きいと知覚させる条件)のほうが、検索の困難な条件よりも大きくなるであろう。仮説 2. 観察者の透明性の錯覚量は、検索の容易な条件のほうが検索の困難な条件よりも大きくなるであろう。

第 2 の目的は、内的経験の違いにより行為者および観察者の透明性の錯覚量のパターンに違いがあるかどうかを検討することである。こちらは明確な仮説を立てず、探索的に検討を行なうものとする。

方法

実験参加者 東京都内の国立大学で一般教養科目「人間行動基礎論」を受講する理系学類所属の学生とその友人、60 名 30 組を実験参加者とした。授業受講者には単位取得要件の一部として参加を依頼し、授業履修者や同じ大学内の学生に限定せず、なるべく仲のよい同性の友人とペアで参加するよう依頼した。

材料 性格特性、行動意図(社会的ジレンマ状況に対してどのような対処法を選択するか)、ものの好みの 3 種類の内的経験を用いた。項目数は順に 16、10、12 項目であった。性格特性は 16 項目の特性形容詞について 7 件法(1. 当てはまらない～7. 当てはまる)で回答させるものであった。行動意図は、対人ジレンマ状況を呈示し、その状況への対処法として自分ならばどのようにふるまうかを 4 つの選択肢から選ばせるものであった。ものの好みは 12 項目のもの(クルマ、バイク、ネクタイ、ペンダント、サンダル、ピアス、バッグ、タンクトップ、リストウォッチ、スニーカー、蚊遣り、デスクチェア)について 6 つの写真を呈示し、好きなものを 1 つ選ばせるものであった。なお、「好きなもの」の意味として、「自分が使うつもりでも、誰かにプレゼントするつもりでも、そのものについての印象でも構いませんので、『1 番よい』と思うものを選んでください」と補足説明を回答用紙に記載しておいた。これらの写真は写っているもののサイズがほぼ同じ大きさになるように編集し、カラーで呈示した。

手続き 参加者ペアのうち、授業の受講者(両方とも受講者である場合はランダムに選んだ片方)を行為者、他方を観察者とした。そして各ペア同士は手元が見えないよう距離を置いて横並びになるように座らせた。実験の中で「友人」と言った場合は一緒に実験に参加している友人を指すものとした。

最初に検索容易性の操作として、ふだん友人とよく 2 人だけで行なっている活動を思い浮かべさせた。検索容易条件では 3 項目、困難条件では 8 項目挙げるよう教示し、回答用紙に記入させた。約 10 分の回答時間を取り、指定された数の活動を挙げきれていなくてもそこで作業を終了させた[2)]。

次に行為者と観察者それぞれに対応する質問項目に回答させた。行為者に対しては、まず 3 種類の内的経験について自己評定をさせた。それから、同じ回答時間中に観察者には行為者の自己評定を予想させて

いると説明し、各項目の自己評定が観察者に当てられるかどうかを、当てられると「思う」か「思わない」で推測させた。観察者に対しては、3 種類の内的経験の各項目について、ターゲットの自己評定を予想させた。そしてその予想が当たっているかどうかを、当たっていると「思う」か「思わない」で推測させた。

どちらの役割に対しても、最後に友人との関係性に関する項目と操作チェック項目に回答させた。関係性は、共通基盤知覚の操作チェックとして自分と友人がお互いのことをどれくらいよく知っていると思うかを 0～100%の数値で答えさせたほか、IOS 尺度(Aron, Aron, & Smollan, 1992)を用いて自分と友人の表象の重なりの程度を尋ねた。これは自分と相手をそれぞれ表す円がさまざまな割合で重なっている 7 つの図(1. 接しているだけ～7. 約 3 / 4 重なっている)のうちから、自分と相手の関係をもっともよく表していると思うものを選ばせるものであった。さらに、仲良くなったきっかけ、つきあいの長さ、会う頻度を尋ねた。検索容易性の操作チェックとして、検索課題が難しかったかどうかを 10 件法(1. 簡単だった～10. 難しかった)で尋ねた。

実験終了後にはデブリーフィングを行なった。

結果

女性同士のペア 3 組、友人が来ずその場で組んだ非友人ペア 1 組、異性で参加したペア 1 組のデータは分析から除外し、合計 25 組分のデータを分析に用いた(検索容易条件 13 組、困難条件 12 組)。

透明性指標の算出

内的経験ごとに透明性指標を算出した。行為者が観察者に自己評定を当てられると「思う」と回答した項目数を行為者推測値とした。同様に、各内的経験について観察者が自分は行為者の自己評定を当てていると「思う」と回答した項目数を観察者推測値とした。さらに、実際に観察者が行為者の自己評定を当てていた項目数を実際値とした。

操作チェック

検索容易性 検索課題の難しさの評定値に対して 2(検索条件: 3 項目・8 項目) × 2(立場: 行為者・観察者)の混合 2 要因分散分析(立場は繰り返し要因)を行ったところ、条件の効果は有意ではなく($F(1, 23) = 2.82$, $p = .11$, *ns*)、そのほかにも有意な効果はみられなかった(all Fs < 1, *ns*)。交互作用は有意ではなかったが立場別に条件間で比較すると、行為者による評定値は条件による差がみられなかったが($F(1, 23) < 1$, *ns*; 3 項目条件 $M = 7.23$, $SD = 2.42$; 8 項目条件 $M = 8.00$, $SD = 2.73$)、観察者による評定値は 3 項目条件のほうが 8 項目条件よりも検索が容易だと答える傾向があった($F(1, 23) = 4.06$, $p < .10$; 3 項目条件 $M = 6.46$, $SD = 8.33$; 8 項目条件 $M = 8.33$, $SD = 0.89$)。どちらの立場においても、明確ではないが方向性としては操作で意図したパターンの結果となっていた。

共通基盤知覚 共通基盤知覚の評定値に対して条件 × 立場の 2 要因分散分析を行ったところ、立場の主効果が有意であり($F(1, 23) = 5.85$, $p < .05$)、行為者のほうが観察者よりも共通基盤が大きいと知覚していた(行為者 $M = 48.64$, $SD = 20.07$; 観察者 $M = 39.16$, $SD = 21.57$)。条件の効果を含むそのほかの効果は有意ではなかった(all Fs < 2.74, *ns*)。検索容易性の操作は共通基盤知覚に明確な影響を与えていなかった。したがって、透明性の錯覚は操作による分析と共通基盤知覚による分析の両方を行なって検討する。

IOS IOS 尺度得点に対して条件 × 立場の 2 要因分散分析を行なったところ、有意な効果はみられなかった(all Fs < 1.43, *ns*; 全体で $M = 3.30$, $SD = 1.16$)。

つきあいの長さ 知り合ってからの期間に対して条件 × 立場の 2 要因分散分析を行なったところ、有意な効果はみられなかった(all Fs < 1.92, *ns*; 幅は 3～172 ヶ月、全体で $M = 29.92$, $SD = 39.50$)。

行為者の透明性の錯覚

3 種類の内的経験は項目数が異なるため、内的経験ごとに透明性指標の値を全項目数に占める割合に変換して分析を行なった。

検索容易性による効果の検討 行為者の透明性の錯覚に関する指標の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。この値に対して 2(指標: 行為者推測・実際) × 2(検索条件: 3 項目・8 項目) × 3(内的経験: 性格・意図・好み)の混合 3 要因分散分析(指標と内的経験は繰り返し要因)を行った。その結果、指標の主効果、内的経験の主効果が有意であった($F(1, 23) = 57.10$, $p < .001$; $F(2, 46) = 9.15$, $p < .001$)。ただしこれらは有

Table1 検索条件別に見た各内的経験の透明性指標の平均値と標準偏差

内的経験	行為者推測		実際値		観察者推測	
検索条件	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
性格						
3項目	0.51	*0.13*	0.23	*0.13*	0.55	*0.29*
8項目	0.53	*0.20*	0.26	*0.09*	0.65	*0.19*
意図						
3項目	0.62	*0.22*	0.32	*0.17*	0.62	*0.22*
8項目	0.61	*0.27*	0.33	*0.16*	0.71	*0.19*
好み						
3項目	0.37	*0.16*	0.26	*0.14*	0.52	*0.28*
8項目	0.38	*0.23*	0.30	*0.14*	0.58	*0.19*

意な指標 × 内的経験の交互作用によって調整されていた($F(2, 46) = 5.86$, $p < .01$)。この効果について詳しくみるために、指標ごとに内的経験を要因とした分散分析を行ったところ、実際値は有意差がみられなかったのに対し($F(2, 48) = 2.12$, *ns*)、行為者推測には有意差がみられた($F(2, 48) = 12.31$, $p < .001$)。好みに比べて性格の行為者推測が有意に高く(差は 0.24、 $F(1, 24) = 21.96$, $p < .05$)、性格よりも意図の行為者推測が高い傾向がみられた(差は 0.10、 $F(1, 24) = 4.18$, $p < .10$)。検索条件の関わるそのほかの効果はいずれも有意ではなかった(all *F*s <1, *ns*)。仮説 1 は支持されなかった。

共通基盤知覚による効果の検討 検索容易性による条件では効果がみられなかったため、行為者が評定した共通基盤知覚の値を用いて分析を行なった。共通基盤知覚を標準化した上で、指標(行為者推測・実際) × 共通基盤知覚(行為者の評定) × 内的経験のすべての主効果と交互作用効果を含む一般線型モデルによる分析を行なった。その結果、指標の主効果と内的経験の主効果および指標 × 内的経験の交互作用が有意であり($F(1, 23) = 66.62$, $p < .001$; $F(2, 46) = 9.32$, $p < .001$; $F(2, 46) = 6.21$, $p < .01$)、共通基盤知覚の主効果および指標 × 共通基盤知覚の交互作用が有意傾向であった($F(1, 23) = 3.33$, $p < .10$; $F(1, 23) = 3.88$, $p < .10$)。指標 × 共通基盤知覚の交互作用について詳しく検討するために、行為者推測と実際値それぞれについて3つの内的経験の平均値を取り、その値に対して共通基盤知覚による回帰分析を行なった。その結果、どちらの回帰係数も有意ではなかったが、値の傾向は共通基盤知覚が大きくなるほど透明性の錯覚量が大きくなることを示唆するものであった(行為者推測 $\beta = .05$, $t = 1.44$, *ns*; 実際値 $\beta = .00$, $t = 0.24$, *ns*)。内的経験 × 共通基盤知覚の交互作用および 3 要因の交互作用は有意ではなかった($F(2, 46) = 0.32$, *ns*; $F(2, 46) = 1.35$, *ns*)。共通基盤知覚の平均値+1 標準偏差を取った場合(共通基盤知覚大)と平均値-1 標準偏差を取った場合(共通基盤知覚小)の透明性指標の平均値(推定値)を Figure 1 に示した。

観察者の透明性の錯覚

行為者の透明性の錯覚の分析と同様、内的経験ごとの透明性指標の値は全項目数に占める割合に変換して分析を行なった。

検索容易性による効果の検討 観察者の透明性の錯覚に関する指標の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。この指標に対して 2(指標: 観察者推測・実際) × 2(検索条件: 3 項目・8 項目) × 3(内的経験: 性格・意図・好み)の混合 3 要因分散分析(指標と内的経験は繰り返し要因)を行った。その結果、指標の主効果と内的経験の主効果が有意であった($F(1, 23) = 100.41$, $p < .001$; $F(2, 46) = 3.39$, $p < .05$)。観察者推測は実際値よりも高く、透明性の錯覚が生じていた。内的経験の主効果について詳しくみるために、内的経験別に観察者推測と実際値の平均を取り、この値に対して 1 要因の分散分析を行なった結果、意図に関する透明性指標がほかの 2 つの内的経験に関する透明性指標よりも有意に高かった(意図と性格の差 0.80, $F(1, 24) = 5.42$, $p < .05$; 意図と好みの差 0.80, $F(1, 24) = 4.02$, $p < .10$)。検索条件を含む効果およびそのほかの効果はいずれも有意ではなかった(all *F*s < 1.53, *ns*)。したがって仮説 2 は支持されなかった。

共通基盤知覚による効果の検討 検索容易性による条件では効果がみられなかったため、観察者が評定した共通基盤知覚の値を用いて分析を行なった。共通基盤知覚を標準化した上で、指標(観察者推測・実際) × 共通基盤知覚(観察者の評定) × 内的経験のすべての主効果と交互作用効果を含む一般線型モデルによる分析を行なった。その結果、指標の主効果、内的経験の主効果が有意であり($F(1, 23) = 96.57$, $p < .001$; $F(2, 46) = 3.84$, $p < .05$)、内的経験 × 共通基盤知覚の交互作用が有意傾向であった($F(2, 46) = 3.01$, $p < .10$)。ただしこれらは有意な 3 要因の交互作用に調整されていた($F(2, 46) = 6.17$, $p < .01$)。内的経験ごとに指標 × 共通基盤知覚の主効果と交互作用効果を含む一般線型モデルによる分析を行なったとこ

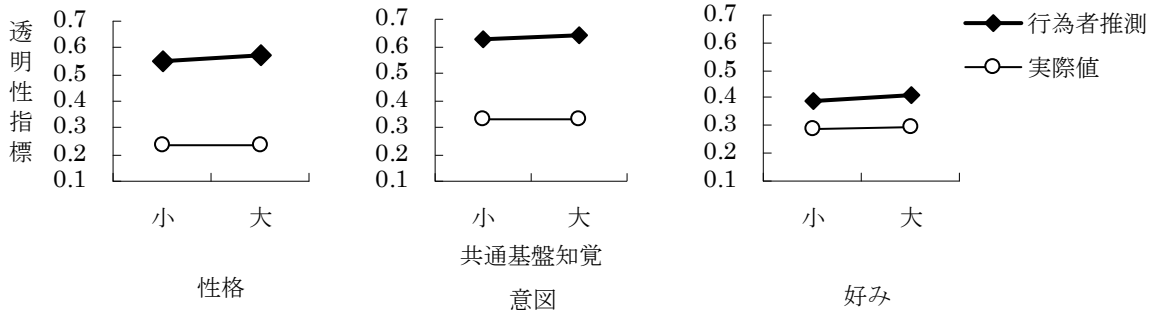

Figure 1 内的経験別に見た行為者の透明性の錯覚に関する透明性指標

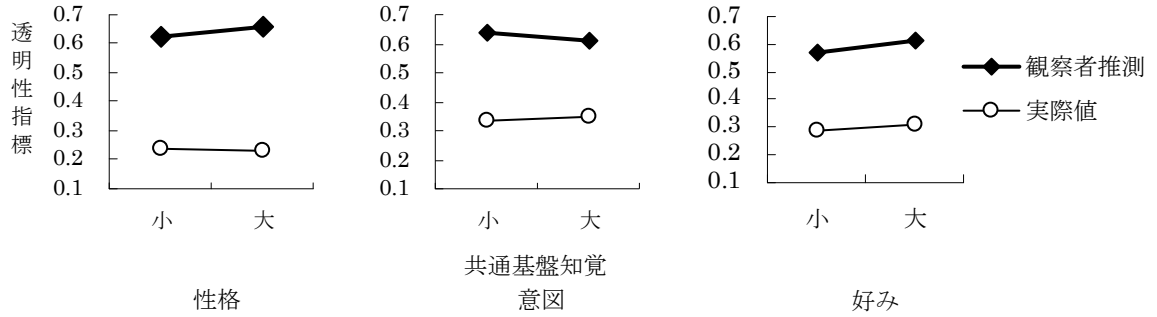

Figure 2 内的経験別に見た観察者の透明性の錯覚に関する透明性指標

ろ、性格と意図に関しては指標の主効果と指標 × 共通基盤知覚の交互作用が有意であった(性格、指標の主効果 $F(1, 23) = 59.80$, $p < .001$; 指標 × 共通基盤知覚の交互作用 $F(1, 23) = 5.26$, $p < .05$; 意図、指標の主効果 $F(1, 23) = 65.03$, $p < .001$; 指標 × 共通基盤知覚の交互作用 $F(1, 23) = 4.72$, $p < .05$)。ただし交互作用のパターンは性格と意図で異なっていた。性格に関しては共通基盤知覚が大きいほど透明性の錯覚量が大きいというパターンであったのに対し(観察者推測 $\beta = .08$, $t = 1.59$, *ns*; 実際値 $\beta = -.03$, $t = -1.26$, *ns*)、意図に関しては共通基盤知覚が大きいほど透明性の錯覚量は小さいという結果であった(観察者推測 $\beta = -.05$, $t = -1.29$, *ns*; 実際値 $\beta = .04$, $t = 1.17$, *ns*)。好みについては指標の主効果のみが有意であった($F(1, 23) = 30.12$, $p < .001$)。そのほかの効果は有意ではなかった(all Fs < 1.67, *ns*)。性格に関しては仮説 2 に対応する方向の結果であったが、意図と好みに関しては仮説とは異なる結果であった。共通基盤知覚の平均値 ± 1 標準偏差を取った場合の透明性指標の平均値(推定値)を Figure 2 に示した。

考察

本研究では共通基盤知覚の違いが行為者および観察者の透明性の錯覚量の違いをもたらすかどうかを検討してきた。また、性格、意図と好みという 3 種の内的経験について同時に測定し、内的経験の違いによる透明性の錯覚のパターンについても検討した。

行為者の透明性の錯覚と観察者の透明性の錯覚はどちらもみられ、この現象の頑健さが確認された。

検索容易性の操作による透明性の錯覚量の違いは、行為者、観察者ともみられなかった。この効果がみられなかった理由の 1 つは、この操作によって共通基盤知覚を充分に操作することができていなかったためと考えられる。本研究では行為者と観察者の 2 者間に特有の共通基盤知覚を操作しようとして「2 人だけで行なっている活動」を挙げさせた。しかし日常生活においては行為者と観察者を含む数人で活動している場合も多く、検索が容易であると想定していた 3 項目条件でも 2 人「だけ」で行なっている活動を挙げるのは困難な課題になってしまっていたことが考えられる。また、他者についての判断をする場合には、自己についての判断をする場合に比べて検索容易性のように本来判断の内容とは無関連な情報は用いられにくいという(Caruso, 2008)。したがって、自分自身を含んでいても、他者との関係についての判断をする場合は、検索容易性に関する情報は判断のための手がかりとして用いられにくいのかもしれない。実際の共通基盤を変えるのでなく知覚だけを変える操作として、検索させる内容を改変するか、検索容易性以外の操作を検討する必要があろう。

検索条件の代わりに参加者による共通基盤知覚の評定値を用いて透明性の錯覚量との関連をみると、観察者においては内的経験の種類によって共通基盤知覚と透明性の錯覚量の関連のパターンに違いがあることが示された。性格に関しては共通基盤知覚が大きいほど透明性の錯覚量も大きかった。これは仮説と一致するパターンである。しかし意図に関しては、共通基盤知覚が大きいほど透明性の錯覚量は小さく、好みに関する透明性の錯覚量のパターンとも意図に関する行為者の透明性の錯覚量のパターンとも異なる結果であった。本研究で意図として扱った内的経験は、社会的ジレンマ状況でどうふるまうかに関する意図であった。そのため、共通基盤知覚が大きいと却ってどういうふるまいを選ぶか行為者が悩むことが推測され、観察者にとってどうふるまうかを言い当てることは難しいと感じられたのかもしれない。

以上のとおり、検索容易性の操作による結果はみられなかったが、共通基盤知覚が行為者および観察者の透明性の錯覚量と関連があることは示された。また、内的経験の種類によって透明性の錯覚量の変動に特に影響を与える要因が異なる可能性も示唆された。共通基盤知覚は、性格のように比較的静的で全般的な内的経験に関する透明性の錯覚量に特に影響を及ぼしやすいのかもしれない。一方、好みや行動の意図など

特定的な内的経験については、別の要因がより強い影響力をもっていると考えられる。例えば、行為者の透明性の錯覚の場合、行為者の主観的経験の強さが影響力をもつであろう。

行為者の透明性の錯覚に関しては、内的経験の種類によって全体的な透明性の錯覚量に違いがみられた。全項目数の割合に単位を揃えてみた場合に、実際値には内的経験によって違いがみられなかったが、行為者推測は意図、性格、好みの順に高かった。つまり、内的経験の種類によって他者にそれを知られているであろうという判断のバイアスの程度に違いがみられるということである。ただしこうした違いは、測定のしかたによる影響も含まれている可能性がある。本研究で扱った内的経験の透明性指標は、項目数が異なるため、取りうる値の幅が異なっている。また、1 つの項目に対する選択肢の数も異なるため、実際値の期待値も異なる。本研究では透明性指標を項目数でなく全項目中の割合に変換した上で内的経験による違いを比較しているが、こうして得られた内的経験による違いの解釈には注意が必要であろう。さらに、項目数や期待値を揃えたとしても、質の違う内的経験を直接的に比較することが妥当かどうかは検討が必要であろう。性格特性に関する項目は外向性などの性質の程度を判断させるものであり、同じ評定値であっても行為者と観察者で想定している質が異なる可能性がある。これに対し、ある状況でどのような行動を取ろうとするか、どれを好むかという具体的な意図や好みの選択肢からの判断は、行為者の内的経験と観察者による予測が質的にも一致していることが明確である。

透明性の錯覚をひとまとまりで考えるのでなく、その内的経験がどのようなものであるかを考慮した上で検討することは、今後透明性の錯覚のより詳細なメカニズムや対人関係などへの影響を検討する上でも重要な意義をもつと思われるが、指標をどのように扱うかという点に充分注意を払っておくことが必要であろう。

引用文献

Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.

Caruso, E. M. (2008). Use of experienced ease in self and social judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 148-155.

Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Clark, H. H., & Carlson, T. B. (1981). Context for comprehension. In J. Long & A. Baddeley (Eds.), *Attention and performance IX*. Hillsdale, NJ: LEA. pp. 313-330.

Clark, H. H., & Murphy, G. L. (1982). Audience design in meaning and reference. In J. F. Le Ny & W. Kintsch (Eds.), *Language and comprehension.* New York: North-Holland. pp. 287-299.

Ehrlinger, J., Gilovich, T., & Ross, L. (2005). Peering into the bias blind spot: People's assessments of bias in themselves and others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1-13.

遠藤由美 (2007). 自己紹介場面での緊張と透明性錯覚 実験社会心理学研究, 46, 53-62.

Fussell, S. R., & Krauss, R. M. (1992). Coordination of knowledge in communication: Effects of speakers' assumptions about what others know. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 378-391.

Gilovich, T., Kruger, J., & Savitsky, K. (1999). Everyday egocentrism and everyday interpersonal problems. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems*. Washington D.C.: APA. pp.69-95.

Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 332-346.

鎌田晶子 (2005). 内的経験の強度が「透明性の錯覚」に与える影響について 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 632-633.

鎌田晶子 (2007). 透明性の錯覚: 日本人における錯覚の生起と係留の効果 実験社会心理学研究, 46, 78-89.

鎌田晶子・堀 洋元・伊藤洋次・吉野大輔 (1999).「透明性の錯覚」: 行為者と観察者相互の視点から 第 40 回日本社会心理学会大会論文集, 224-225.

Keysar, B., & Barr, D. J. (2002). Self-anchoring in conversation: Why language users do not do what they "should". In T. Gilovich, D. Griffin, & D. Kahneman (Eds.), *Heuristics and biases: The psychology of intuitive judgment*. Cambridge, England: Cambridge University Press. pp. 150-166.

Kruger, J., Epley, N., Parker, J., & Ng, Z. (2005). Egocentrism over e-mail: Can we communicate as well as we think? *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 925-936.

工藤恵理子 (2007). 親密な関係におけるメタ認知バイアス ―友人間の透明性の錯覚における社会的規範仮説の検討― 実験社会心理学研究, 46, 63-77.

Nickerson, R. S. (1999). How we know ―and sometimes misjudge― what others know: Imputing one's own knowledge to others. *Psychological Bulletin*, 125, 737-759.

Pronin, E., Lin, D. Y., & Ross, L. (2002). The bias blind spot: Perceptions of bias in self versus others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 369-381.

Pronin, E., Puccio, C., & Ross, L. (2002). Understanding misunderstanding: Social psychological perspectives. In T. Gilovich, D. Griffin, & D. Kahneman (Eds.), *Heuristics and*

biases: The psychology of intuitive judgment. New York: Cambridge University Press. pp. 636-665.

Ross, L., & Ward, A. (1996). Naive realism in everyday life: Implications for social conflict and misunderstanding. In T. Brown, E. Reed, & E. Turiel (Eds), *Values and knowledge*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 103-135.

Savitsky, K., & Gilovich, T. (2003). The illusion of transparency and the alleviation of speech anxiety. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 618-625.

Schwarz, N., Bless, H., Strack, F., Klumpp, G., Rittenauer-Schatka, H., & Simons, A. (1991). Ease of retrieval as information: Another look at the availability heuristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 195-202.

Semin, G. R. (2007). Grounding Communication: Synchrony. In A. W. Kruglanski & E. T. Higgins (Eds.) *Social psychology: Handbook of basic principles* (2nd ed.). New York: Guilford Press, pp.630-649.

Swann, W. B. Jr., & Gill, M. J. (1997). Confidence and accuracy in person perception: Do we know what we think we know about our relationship partners? *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 747-757.

武田美亜・沼崎 誠 (2007a). 相手との親密さが内的経験の積極的伝達場面における 2 種類の透明性の錯覚に及ぼす効果 社会心理学研究, 23, 57-70.

武田美亜・沼崎 誠 (2007b). 共通基盤の想定が透明性の錯覚に及ぼす効果 対人社会心理学研究, 7, 11-19.

武田美亜・宇賀神 博・内田芳則・松田文子 (2006). 知覚された共有知識量が 2 種類の透明性の錯覚に及ぼす影響 武蔵野大学人間関係学部紀要, 3, 99-112.

Van Boven, L., Kruger, J., Savitsky, K., & Gilovich, T. (2000). When social worlds collide: Overconfidence in the multiple audience problem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 619-628.

Vorauer, J. D. (2001). The other side of the story: Transparency estimation in social interaction. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition.* Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 261-276

Vorauer, J. D., & Cameron, J. J. (2002). So close, and yet so far: Does collectivism foster transparency overestimation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1344-1352.

Vorauer, J. D., & Ross, M. (1999). Self-awareness and feeling transparent: Failing to suppress one's self. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 415-440.

Wu, S., & Keysar, B. (2007). The effect of information overlap on communication effectiveness. *Cognitive Science*, 31, 169-181.

註

1) 本研究の一部は日本心理学会第 72 回大会(2008 年 9 月、於北海道大学)において発表した。

2) 検索容易条件において、友人と 2 人だけで行なっている活動を 3 項目挙げることができなかった参加者は、行為者と観察者に 1 人ずついた。困難条件で、挙げられた項目数の平均は 6.21 項目であった(行為者 M= 6.08, SD= 2.47; 観察者 M= 6.33, SD= 1.83)。

The effects of perceived common ground on illusion of transparency of some kinds of internal experiences

Mia TAKEDA (*Faculty of Sociology, Toyo University*)
Makoto NUMAZAKI (*Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University*)

We examined the effects of perceived common ground on actor's and observer's illusion of transparency. We also explored the possibility that differences in the pattern of illusion of transparency depends on internal experiences. Twenty-five male-friends were paired as an actor and as an observer. Participants recalled three or eight examples of joint activity with their partner. Actors indicated three kinds of internal experiences: sixteen personality traits, best solutions for ten personal dilemmas, and preferences for twelve items. Then they inferred whether their partner could correctly guess these internal experiences. Meanwhile, the observers guessed their partner's internal experiences and judged whether these guesses were correct or not. Effects of ease-of-retrieval were not found, but actors showed greater overestimation of the transparency when the perceived common ground was greater. Similarly, observers showed greater overestimation of the correctness of their guess on the partner's personality when the perceived common ground was greater. The role of internal experiences in determining the relation between illusion of transparency and interpersonal relationships is discussed.

Keywords: illusion of transparency, actor and observer, common ground, ease of retrieval, internal experiences.